

八代集抄

千載発端序

三十四

特別
イ 4
3163
104(34)



千載和歌集 二十卷

奇負八雲云々二百八十首又種并正曆之後奇撰之

拾遺抄云一系院永延之後奇撰之

文治四年四月七日後白河院乃院宣了（中）了（下）入道
後御卿奏之述世乃人撰了（中）ハ在撰和奇式了
唯（中）集序了（中） 嘉承三年二月了院宣了（下）

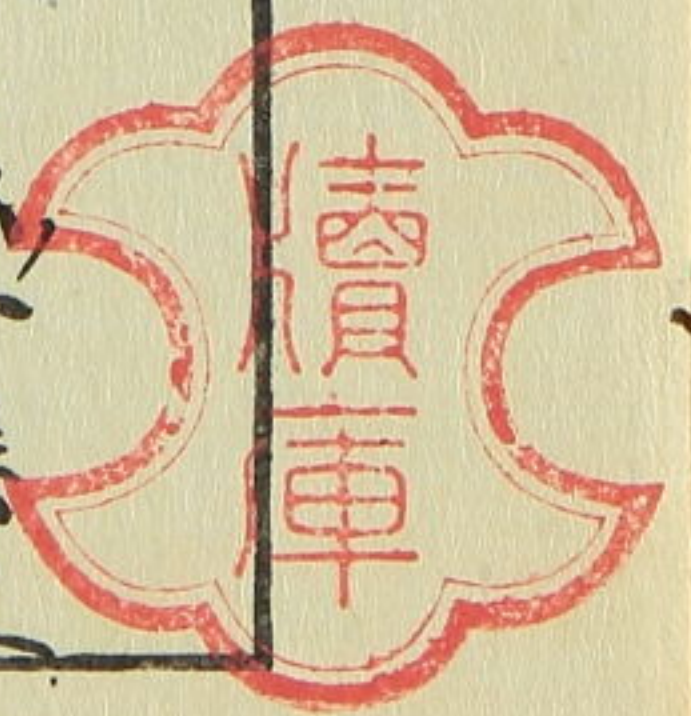
了（中）之後中將平資國（中）了（中）宣下（中）状云
近古以來和歌可冷撰進給者依院宣上啓如辨

月日

右中將資國

藤上 入道三位殿

拾遺抄了（中）



井筒物云中納言入名 定家之シ 為法和尚スレニシテ 進々状了
 為新法師日本第一と稱せし一尊と云ふものありて
 亡父并より此と云ふもの十分あり及ぶと云ふ
 河抄云為世に後成の遺言と云ふに及ぶと云ふ定家
 の遺言ありしと云ふことありて
 心敬信於私語と定家云お家乃并をとりておらふ
 とある。年いさやうと云ふことのおおしよつた灯が
 ありし。酒の肴をたらしし。おまぬるにされし母の言
 事下し亡父のよき事ありしと云ふ珠の秀也と云ふおぬ
 ぐれ。涼衣のやうなすし細いもの。あまのりしと云ふこと

十三年五

あをいりすすけいし。おまぬるにされし母の言
 事下し亡父のよき事ありしと云ふ珠の秀也と云ふおぬ
 ぐれ。涼衣のやうなすし細いもの。あまのりしと云ふこと
 亡父并より此と云ふもの十分あり及ぶと云ふ
 河抄云為世に後成の遺言と云ふに及ぶと云ふ定家
 の遺言ありしと云ふことありて
 心敬信於私語と定家云お家乃并をとりておらふ
 とある。年いさやうと云ふことのおおしよつた灯が
 ありし。酒の肴をたらしし。おまぬるにされし母の言
 事下し亡父のよき事ありしと云ふ珠の秀也と云ふおぬ
 ぐれ。涼衣のやうなすし細いもの。あまのりしと云ふこと

もこや乃山をよけ院後位をゆつせまひくほの流ありさる也
 八雲物よととや乃山仙洞をよまき莊子逍遙遊篇三藐姑射之
 山有神人としてるこまの院の流ありはつりある極とあり
 おをまきふ菊のあ おをまきふいふ乃洞乃とひひや李白の詩
 緑溪見緑篠とひはくまの菊乃あり南陽郡縣より丹谷あり谷
 乃水甘美也上り大菊のり谷中の人けありその今く上書の前首二
 三十中書は百餘家とてつり風俗通より力を菊のあとしてる
 ありそはは今院の流ありかりとすを記をふむらば家の
 庭よまき谷玉の基よ菊のあまきせりよ乃川よを對とく
 去より所まき文林とや

くれこれとありせて
 後位の院は即位乃
 久壽二年とわ集
 夢後文治二年と
 二十三年の即位
 かまこれとありせて今うちあま
 乃今より乃春林よまんあつとよけ
 ねあまねきれうつくと林は乃の

とあり乃のらとら
 年教と押合せり
 あまねきれうつと
 百友より万民とく
 万友より仁徳とく
 林は乃日本
 乃り也
 かのまきくさまひ日乃きはめく今春
 乃園は花よりはうとちくまれ
 けりふよりとまきくはくはく
 ひまきくらとらうまきありまのう
 てじりくすくさね情あり

天下國家よ法まは直法
 毛詩三黍稷非馨明德惟馨
 春乃園と對て後位の院をかめ
 かんうけり今乃波や西りあま
 名山乃ありとまきくさまひ日
 ちりくあまはりまつり
 徳仁愛惠徳乃考よ別所く一
 徳仁愛惠徳乃考よ別所く一近臣
 徳仁愛惠徳乃考よ別所く一近臣

乃若撰武の例
 ちる事との多し
 何の位に
 昔此撰者ハ百葉ハ
 諸諸見方大臣是也
 位之等古今置之
 躬恒等も
 但後成位ハ一品
 多乃何等
 詞ハ謙退ハ辨揚
 松乃戸乃 後成
 集ハ安元二年八
 月入乃素門の目

ハのきまらるる
 中ハ松乃戸乃
 若乃
 僧喜撰
 このわ
 とは
 ぬ
 ます

子序四

乃若撰武の例
 彼若撰
 勅と
 集を撰
 文治三年
 後

ハのきまらるる
 中ハ松乃戸乃
 若乃
 僧喜撰
 このわ
 とは
 ぬ
 ます

